心地よい眠りの闇に漂っていた意識が揺り起こされたのは、随分と早い時間だった。
「魔王様、魔王様起きて下さい、遅刻してしまいますよ」
「ん……芦屋?」
真奥は自分を揺り起こしているのが同居人にして腹心の部下にして縁の下の力持ちにしてとにかく生活に欠かすことのできない悪魔大元帥アルシエルこと芦屋四郎であることを認識する。
「……おい、随分早くねぇか? まだ……あれ? 時計……」
真奥は目をこすりながらあくびをして、いつも通り時間を確認しようと顔を上げ、いつもの場所に時計が無いことに気づく。
「あった。まだ五時半じゃないか……うん?」
顔を巡らせると、普段は左側の壁にかけてある時計が、今日は何故か枕元にあった。
昨夜は気づかなかったが、芦屋が何かの気まぐれで模様替えでもしたのだろうか。
いや、置き型の目覚まし時計など、そもそも持っていただろうか。
真奥はいつも通り朝食の準備を整えている芦屋の後ろ姿に声をかける。
「昨夜閉店に手間取って帰り遅かったからもう少し寝かしてくれよ……」
東京の渋谷区、幡ヶ谷にあるファーストフード店マグロナルド幡ヶ谷駅前店でアルバイトクルーとして働く真奥貞夫は、時間帯責任者として閉店業務を行うことがあるのだが、昨夜は閉店時間を過ぎても居座ろうとするお客とひと悶着あり、帰宅が大幅に遅れたのだ。
寝ぼけ眼でそう訴えるが、芦屋は困惑した様子で振り向いた。
「ですが、今日は朝からコウモンマエの掃除に出ると仰っていたではありませんか」
「掃除? 俺そんなこと言ったかぁ?」
はっきりしない頭で今日の予定を思い出すが、町内会の掃除だったら大分前に終わったはずだ。
「……ってか、何だよコウモンマエって」
芦屋の口から飛び出す耳慣れない言葉に真奥は首を傾げるが、今度こそ芦屋は眉根を寄せた。
「コウモンマエはコウモンマエに決まっているでしょう。学校の正門前のことですよ。もう夏休みも明けたのです。いつまでも休みボケしていられませんよ。しっかりなさって下さい」
「学校……? 夏休み……?」
どうも芦屋の様子がおかしい。
いや、思えば目覚めた瞬間から違和感はあった。時計の位置や、照明の色、キッチンの道具のわずかな配置の違い、畳の色などなど……。
意識がはっきりしてくるに連れて、違和感はとめどもなく膨れ上がってゆく。
そして決定的な一言が、芦屋から放たれた。
「上着の第三ボタンが緩んでいましたから直しておきました。替えが無いのですから、あまり無茶な行動はされませんように」
そう言って芦屋が指さす方向にあったのは、
「……が、学生服?」
黒い生地に、金のボタン、白い襟カラー。
どこからどう見てもそれは男子用学校制服、即ち『学ラン』であった。
「ま、ま、待ってくれ芦屋!? な、なんだこりゃ!? 何で俺が学生服なんか……」
眠気を異世界に吹っ飛ばす勢いで立ち上がった真奥は、慌てて周りを見回す。
自分がいるのは、自分の家ではない。
笹塚の魔王城、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室ではない。
キッチン付属の六畳間ということで完全に油断していたが、よく見れば天井や壁の質感もヴィラ・ローザ笹塚とは全く違う。何より窓から見える光景は、真奥が見たことのない場所だったし、窓そのものも随分と大きくなっていた。
「な、何なんだよこれは!?」
「魔王様!?」
真奥は下着姿のまま、芦屋の制止の声も聞かず開き戸ではなく引き戸になっている玄関から外に飛び出す。
真奥がいる部屋は、とても大きな建物の一室のようだ。
長い廊下がどこまでも続くが、天井の蛍光灯は点灯しておらず、窓から朝の光らしきものが差し込んでいるものの全体的に薄暗い。
そして真奥が飛び出した部屋のドアには『用務員室』のプレートが。
「な、な、な」
「魔王様一体どうしたというのです。そろそろ

はたらく魔王さま！

部活の朝練の生徒達が登校してきますよ。彼らにアピールすると昨夜は息巻いていたではありませんか。早く朝食を召し上がって下さい」
狼狽する真奥と、まるでいつも通りの芦屋。
いや、芦屋の格好もよく見るとおかしい。
芦屋は上下揃いのジャージなど持っていただろうか。
「あ、あ、あ芦屋？　お前本当に芦屋か⁉」
真奥は冷や汗を流し、半分涙目になりながら芦屋の体を揺さぶる。
見た目は芦屋は間違いなく芦屋であり、服装とこの状況に馴染んでいること以外は真奥の知る芦屋のように見える。
だが彼の言葉は明らかに真奥の知る芦屋が発するものではない。
「ま、魔王様⁉　お、落ち着いて下さい。どうされたというのです？」
「お前の方こそどうしたっていうんだよ⁉　何だよここ⁉　どこかの学校なのか⁉　何で俺達こんなとこにいるんだ⁉」
「何でと申されましても」
芦屋は困惑して言う。
「それこそ根源的なことを言えば、エンテ・イスラ征服をエミリアに邪魔されたからとしか申し上げられませんが……」
「エミリア!!　恵美どこにいるんだ⁉」
ようやく自分の知っている言葉が出てきて真奥は少しだけ心の余裕を取り戻す。
「え、恵美に聞いてみよう！　俺が何でこんなとこにいるのか。えっと、携帯、携帯は……」
真奥は慌てて室内に戻るが、何故か普段枕元で充電しているはずの携帯電話がどこにも無い。
「あれ、俺の携帯は……」
「また携帯電話の話ですか。今の我々の状況では買えないと何度も申し上げているではありませんか。ご学友と連絡を取るなら、そこの電話を使って下さい。使いすぎると理事会で怒られますから程々になさって下さいね」
「は⁉」
芦屋が指さす先にはまたも見慣れないもの。
かなり古い型だが、明らかに固定電話だった。
飛びついてみると電話のすぐそばの壁に電話帳のようなものが貼り付けられており、
「内線、職員室、校長室……外線、警察、消防……なんだこりゃあ」
意味は分かるが理解しがたい項目が書き連ねられていた。
慄く真奥は芦屋をもう一度問い詰めようとして、ある事実に気がついた。
部屋の真ん中にあるカジュアルコタツの上に用意されている箸と茶碗とおかずの皿。
真奥と芦屋の分、一セットずつ。
真奥は震える声で、恐る恐る芦屋に尋ねた。
「な、なぁ芦屋……う、漆原の分は、用意しなくていいのか？」
いつもの芦屋なら、寝坊するのが悪いとか、働かざる者食うべからずとか言ってくれるはずだ。頼む、そう言ってくれ。
だが芦屋は、困ったような顔で首を傾げた。
「ウルシハラ……？　私も全ての生徒の名を把握しきれていないので……ご学友ですか？」

※

「な、何がなんだか……」
真奥は自分の体にぴったり合う学生服を纏い、芦屋に持たされた箒と塵取りとゴミ袋を持って、用務員室を出た。
大体の見当をつけて外に出ると、早朝から朝の光に変わった太陽が、真奥が見たこともない場所の全貌を照らし出す。
「日本……だよな」
学校と思しき建物の中にあった様々な掲示物は日本語で書かれていた。
建物や運動場、更には敷地の外に見えるマンションや家々などは見知らぬ場所ではあるものの、見慣れた雰囲気を醸し出している。
「無一文……逃げるわけにはいかないな」
真奥は学生服のポケットをまさぐり、金を持ち歩いていないことを確認する。
日本なのだからすぐさまここから逃げ出して笹塚のヴィラ・ローザ笹塚を探し出したいところだが、この場所が最低でも東京でないと即時路頭に迷う。
それに全く意味不明な行動を取っているとはいえ、自分を『魔王様』と呼ぶあの芦屋は間違いなく真奥の腹心の部下にして悪魔大元帥アル

シエルの人間型、芦屋四郎である。
真奥は腹いっぱい朝食を食べた腹をさする。
あの味は、間違いなく芦屋の料理の味だ。天界やエンテ・イスラからの刺客がいかに外見を擬態しても、あの味と質素さは真似できまい。
彼がいる以上、ここから自分一人が逃げ出しても状況が好転するとは思えなかった。
「少なくとも恵美がいることは分かってるんだ。そっちから話を聞いた後で考えるか」
恵美に負けてエンテ・イスラから逃げてきたという、日本生活の大前提は変わらないのだ。
幸いにして衣食住に困る環境ではないようだし、しばらくは状況の推移を見守るしかない。
「となると、掃除するしかねぇのか」
芦屋は、今日の朝の真奥の予定を校門前の掃除と言っていた。
「そうだ！　学校名！　大抵は校門のところにあるはずだ！　防災地図とかも学校の近くにあるし、それで俺がどこにいるのか分かるぞ！」
真奥ははたと気づいて、何となく校門であろう方向に向かって駆け出す。
芦屋が言っていた『部活の朝練』のために登校してきたと思われる生徒が来る方目がけて走り、段々周囲の光景がそれらしくなってくる。
並木道を連想させるタイル張りの道に出た真奥は、凝った作りの鉄の門扉を発見し、ここが正門だと確信する。
「まずは学校名を……あれ？」
すると真奥は、校門に一人の女子生徒が立っていることに気づいた。
セーラー服姿の長い髪。真奥に女子高校生の知り合いはほとんどいないが、何故かその後ろ姿、もっと言えば後頭部に見覚えがあった。
恐る恐る近づくと、女子生徒が気ついてこちらを振り向いた。
目と目が合い、真奥はその場で足を止めて固まってしまい、相手はといえば、真奥の顔を見るなり嫌悪感で思い切り顔を歪めた。
「え、恵美……なのか？」
振り返った女子生徒は、間違いなく遊佐恵美であった。
勇者エミリア・ユスティーナ。真奥と芦屋が日本に来るに至った元凶とも言うべき女。
最近ではちょっと離れたところに住んでるご近所さん程度の間柄になりつつあるが、恵美が勇者であり真奥が魔王である以上、決して相容れない関係である。
「……朝から嫌なもの見ちゃったわ」
その口から洩れる声も、聞き慣れた恵美の声そのものだ。
真奥の方を見ながらも手を止めない恵美の様子を見て、真奥は嫌な予感にかられる。
「お、お前、こんなところで何やってんだ」
「掃除以外の何だと思うわけ」
真奥に対してつっけんどんな反応も普段通り。
普段通りなのに、やはり違和感が拭えない。
真奥は未だ、着慣れない学ランの固さに動きがぎこちなくなるが、いかにも女子高生といった制服を纏う恵美には、そんな逡巡は微塵もない。完全に制服を着こなしている者の動きだった。
そのせいか、見慣れた顔立ちであるはずなのに、普段より幼く見える気がする。
年相応に見える、と言った方が角は立たないだろうが、とにかく恵美が完全に女子高生になってしまっていることに真奥はひどく混乱した。
「な、何のために……？」
真奥が突っ込んで聞いてみると、恵美は忌々しそうにため息を吐いてから、真奥の手にある箒を見た。
「選挙活動の一環よ。あなただってそのつもりで来たんでしょう？　昨日もあんなに大騒ぎしてたくせに」
「センキョ⁉」
また聞き慣れない言葉が飛び出してきた。
それと同時に、真奥の疑念は確信に変わる。
この恵美も、真奥の知る恵美ではない。
「改めて言っておくけど、あなたに生徒会長の座は渡さないわよ。魔王なんかに、学校を支配させるわけにはいかない」
最近わずかながら当たりが柔らかくなってきた恵美に比べて、日本で出会ったばかりの頃を思い起こさせる反応に真奥は狼狽する。
しかも生徒会長とはどういうことだ。座は渡さない、とはつまり自分が生徒会長とやらに立候補しているということか。芦屋が言っていた『朝練の生徒にアピール』とはそういう意味だ

ったのか?
状況が整理されればされるほど混乱を深める真奥をよそに、恵美は厳しい声で言い放った。
「ここはもう、私が取ったわ。あなたと二人で校門掃除なんか真っ平御免だから、どこか別のところを当たって」
「あ、ああ……わ、分かった」
真奥は頷くとすごすごと引き下がる。
その様子を見た恵美はふらふらと歩み去る真奥の背を見送りながら、違和感を覚えていた。
「随分素直に引き下がったわね……」

「何だ何なんだ一体こりゃ何なんだよ!?」
真奥は最早パニック状態で校内を走っていた。
芦屋も恵美も真奥の知る二人では断じてない。
だが二人は自分を認識していて、むしろ真奥こそ普段通りではないかのような反応を見せる。
気がつくと真奥は校舎の裏手。砂利が敷き詰められた駐車場のような場所にいた。
そこにはプラスチックコンテナを積んだトラックが停まっていて、
「あ、真奥君!」
運転席から降りてきた業者らしき男が、気さくな笑顔で自分に声をかけてくるではないか。
「え? あ……え?」
「丁度いいとこで会った。悪いんだけどさ、今から購買部に運び込んで大丈夫かな、今日だけ緊急で別ルート回らなきゃいけなくってさ」

「あの、えっと……」
次から次へと訳の分からない事態が舞い込んできて、真奥の頭は既にショートし始めていたが、遂に究極的に意味不明な事態が起こった。
「どうした、まーくん」
真奥の耳に、真奥が日本で誰よりも尊敬し頼りにしている人間の声が聞こえてきたのだ。
謎の業者に謎の判断を迫られていたところにまさしく天の助けとばかりに現れた人物を、
「あ、おはようございます木崎先生」
「ヴぇっ!?」
謎の業者は『先生』と呼んだではないか。
見慣れぬ乗用車から降りて真奥に近づいてくる女性は、間違いなく木崎真弓。真奥のアルバイト先であるマグロナルド幡ヶ谷駅前店の店長であるはずの女性だ。
だが今、この業者の男は木崎を『先生』と呼んだ。木崎もまた、学校の教員らしくタイトなスーツとブラウスにネクタイの出で立ちだ。
本社や事業所に向かうスーツとは明らかに違う、教師然とした風貌の木崎を、真奥は震えながら迎える。
「事情は分かりました、真奥にやらせますからそこの入り口に積んでおいて下さい」
「助かります、明日からまたいつも通りになりますから」
真奥が見ている前で二人の会話はてきぱきと進み、真奥の目の前にパンやらうどんやらが入ったプラスチックコンテナがうずたかく積み上げられてゆく。
「まーくん、君、最近うどん屋台担当の一年生と仲がいいだろう。鎌月さんとか言ったか。すまないが彼女の発注書と内容を照らし合わせて一限が始まる前に……おい、どうしたまーくん、顔色が悪いぞ」
また耳慣れた名前が出てきたが、少なくともその名の持ち主は発注書などという単語とは無縁の生活を送っているはずだ。
真奥の顔から血の気が失せ、膝ががくがくと笑い始め、
「おいっ!? 大丈夫か、しっかりしろ!」
遂にその場に倒れてしまったのだった。

「真奥さん……大丈夫ですか?」
聞き慣れた、優しい声が真奥の意識を覚醒させた。真奥の体調を心の底から気遣う声。真奥が心から信頼する人間の声だ。
「……あぁ、ちーちゃん……」
「あ、目、覚めました? 大丈夫ですか?」
目を開けると、そこには畳の部屋で横たわる自分を心配そうに覗き込む佐々木千穂の顔があった。
「いや、ちょっと変な夢見て、気分が悪くて」
「そうだったんですか」
いつもと変わらぬ千穂の言葉と笑顔に、真奥はほっとして上体を起こそうとする。
「芦屋さん、今用事があって出かけてます」

「そっか……いやぁ、本当に訳分かんねぇ夢でさ、心臓に悪い……」
「怖い夢見て倒れちゃうとか、真奥さん可愛いところあるんですね」
「何だよ、魔王だって夢は見るんだぞ」
ころころと笑う千穂に真奥はふさけ半分にそう言うが、
「魔王って何ですか?」
聞きたくなかった言葉が耳に入ってきて、真奥は背筋が凍る。
「何ですか……って、ち、ちーちゃん?」
真奥は強張った顔で尋ね返した。
何を言っているんだ、千穂は。千穂は日本でただ一人、自分や芦屋、恵美の正体と出自を知っているはずだ。
「はい?」
小首を傾げる千穂は、いつも通りの学校の制服姿。見慣れた、いつもの千穂だ。だが、
「あ、そうだ、今日の購買は私と鈴乃ちゃんで何とかなりましたから、安心して下さいね」
口から出てくる言葉は、
「それと、今日の授業で配られたプリント類です。数学で小テストがあったんで、木崎先生が明日職員室に来るようにって……真奥さん?」
真奥が知る千穂の言葉ではなかった。
「……っ〜!」
「ま、真奥さん!? 真奥さんっ!?」
今度こそ真奥は、その場でもんどりうって卒倒してしまったのであった。

※

「一体どうしたっていうのよ」
「ばば、かぜ?」
「真奥さん……」
「ババ殿らしくもないな」
「鬼の霍乱ってやつかねぇ」
恵美とアラス・ラムス、千穂と鈴木梨香ら2-A女子の面々、そして購買で働く一年生、鎌月鈴乃の五人の女子が、用務員室前の廊下でたむろしていた。
全員が高校の制服に身を包み、全員が真奥の体調をそれぞれに気にかけている。
真奥が、もう三日も学校を休んでいる。
いや、学校内に住んでいる真奥が『学校を休む』という表現が正しいのかは分からない。だがとにかく重篤な体調不良や怪我というわけでもないのに、真奥はもう三日も授業にも出ず、購買にも顔を見せず、選挙運動もしていない。
「ま、このまま表舞台から引っ込んでくれるなら、選挙と学校の行く末は安心だけど」
恵美の声色は冷たいものの、真奥の様子に張り合いの無さも感じているらしく、どこか無理をしているようだった。
「うーん、でも、学校内で登校拒否ってのも斬新だねぇ。これは表沙汰になったらちょっと選挙には悪影響だよ」
生徒会長選挙において恵美のブレーンを自称している梨香は腕を組む。
「すずねーちゃ、ばば、かぜ?」
恵美の腕の中で、赤ん坊の体に合わせた制服を纏ったアラス・ラムスが鈴乃に尋ねる。
「今時は学生の心の病もバカにできないというが……だがババ殿にはそんな兆候は見られなかったからな。休み始めた前の日にも、売り上げで私のうどん屋台に倍近い差をつけたと大威張りしていたし」
鈴乃も首を傾げながら、隣の千穂を見る。
「千穂殿は何か知らないのか」
「何も……顔を合わせたのは、真奥さんが最初に倒れた日の用務員室だったし……」
まるで自分が体調を崩したかのような顔色で真奥のことを心配する千穂は、今にも倒れてしまいそうだ。
「あ、でも真奥さん、三日前に目が覚めたときに、何か変なこと言ってました」
「変なこと?」
「はい。何だか、魔王がどう、とか」
その瞬間、恵美と鈴乃の顔が微かに強張る。
「魔王? 魔王ってシューベルトのお父さんお父さん魔王が来るよってあれ? それとも何かのゲームの話?」
「……私もそれくらいしか思い浮かばなかったんですけど」
梨香の問いに千穂は首を横に振る。
「でもこのままじゃ真奥さん、本当に授業も遅れちゃうし、購買部や木崎先生からの評価も下